經濟論叢

第八十四巻　第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿
統計学＝社会科学的認識手段論の問題点……大橋隆憲　1
資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの(二)…吉村達次　17
急速税務減価償却をめぐる所得税会計の保守主義……高寺貞男　37
ヘンリ・ジョージについての一考察…北沢康男　55
ソースタイン・ヴェブレンに関する一研究……中山大　68
神戸正雄先生による再保険特約方式の輸入……佐波宣平　85
記事
神戸先生御逝去……91
追憶文……96
新村出　井藤半弥　本庄栄治郎　小島昌太郎
石川興二　蜷川虎三　大谷政敬　小山田小七
堀江保蔵　島恭彦　松井清

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

記事

神戸先生御逝去

昭和三十四年十月十六日午前二時、京大名誉教授、日本学士院会員、法学博士神戸正雄先生は、胆石病のため急逝せられた。享年満八十二歳。何の訴えるところもなく、些かの苦痛の表情もなく、文字通り眠るが如き大往生であったとのことである。

先生は、明治十年四月愛知県一宮市に誕生、三十五年東京帝国大学卒業、直ちに大学院に入って財政学を専攻、三十五年京都帝国大学に迎えられて法科大学助教授に就任、四十年教授に昇任された。大正八年、法科大学から別れて経済学部が創立されるとともに、同学部勤務に転じ、もって、昭和十二年の定年退官にまで及んだが、助教授就任以来ここに至るまで実に三十有五年、その間一貫して財政学を研究し教授せられ、かたわら或いは経済学部長、京都大学評議員、或いは京大経済学会評議員などとして、京都大学、京大経済学部、京大経済学会の発展のために尽瘁せられた。財政学とくに租税に関する偉大な研究業績をもって、昭和三年、先生は学士院から恩賜賞を受けられ、立派な人格と相俟って同五年には学士院会員に列せられた。

京大退官と同時に関西大学学長に迎えられ、同大学興隆のために尽されること七ヵ年余、ついで昭和二十二年四月には、公選による第一次の京都市長に就任、四年の任期を満了して退職、その後自治庁関係の地方行政調査委員会議長の要職につかれたが、二十七年三月にその任務を完了して退職、二十八年十一月には文部大臣から文化功労者賞を受けられた。

すべての公職を去ってのち、先生は河原町夷川角の自宅に悠々自適、学士院月例会に出席のため東上したり、京大経済学会の研究会その他の会合に出席したり、夫人を同伴して小旅行をしたりして余生を楽しんでおられた。東大経済学部助教授であった長男正一氏をヒリピン戦線で失われ、すでに嫁がれた長女にも先立たれて、直きの嗣なき先生は、繰り言らしい言葉を一言もいわれなかったけれども、内心には一抹の淋しさを感じておられたことであろう。それかあらぬか、先生は、わが子の如く育て上げた京大経済学部および京大経済学会に対して、退官後も慈父のごとき気持を寄せられ、昭和三十二年には経済学会へ五十万円を贈って下さった。実はこれより先、昭和二十九年、研究奨励の目的で賞金設定の意向を表明せられた。これにもとずき、学部では神戸賞設定のことを議し、ある点まで実行に移すことになりながら、学部内の諸般の事情でそれを実現しえなかったことは、まことに遺憾であり、かえりみて、先生に対し、まことに申訳ない次第である。

先生の物心両面からの御厚意にむくいるため、経済学会では、昭和三十二年、先生が八十歳になられたのを機会に、「経済論叢」第八十巻第四号を「神戸正雄博士八十歳祝賀記念論文集」にあて、元教官各位にも御執筆を願って、堂々三五一頁の論文集を発行した。その巻頭に、先生の近影、筆蹟と併せて、先生御自身で作製された経歴および業績の概要が掲げられており、又『神戸博士還暦祝賀記念論文集』本誌第四十四巻第五号（昭和十二年五月発行）に昭和十二年に至るまでの先生の詳細な経歴及び著作目録が掲載されているから、ここでは収録しないことにする。

先生の訃報に接したわれわれは、直ちに相会して善後を議し、学部または学会で告別式を営む案を検討した。たまたま、未亡人に、京大の然るべき場所を告別式場に貸してほしいという御意向があることを聞いたので、元市長として、また市の有功者として、先生に特別の関係がある京都市の当局者とも相談の上、京大当局の諒解をえて、京大経済学部の主催で告別式を執行することに決定した。学部葬という言葉を使わなかったのは、それが現職教官の場合に限って許されているからである。

また、告別式をすべて無宗教形式にしたが、それは、国立大学の構内で行う告別式には宗教的儀式を用いることができないという規定に則ったものである。しかしこのことは、神戸先生

との告別にはむしろふさわしかったと思う。というのは、先生はもともと神職の家に生れられたが、自身は宗教の種類や宗派には全く超越的立場にあられたからである。

十月十八日（日曜）、告別式場にあてられた法経第七教室には、白菊をすすきで縁取り白一色で飾った清楚な祭壇にお遺骨が安置され、その上方に、市長時代のほほえみかけるような先生の遺影が掲げられた。御遺骨の前には御下賜の祭粢料が供えられ、文化功労者賞と賞状が捧げられた。祭壇の両側は文部大臣、日本学士院、地方自治庁長官、京大総長、京都市長、関西大学、京大経済学部からの、これまた白菊の供花で埋められた。

午後二時、静田教授の司会で告別式開始、京大総長平沢興、経済学部長青山秀夫、日本学士院長山田三良（同会員本庄名誉教授代読）、関西大学学長矢口孝次郎、京都市長高山義三、京都府知事蜷川虎三（代読）、友人代表新村出、門下生代表大畑文七の諸先生・諸先輩の弔詞が読まれた。いずれも、それぞれの立場から、先生の人格、学問、業績を偲ぶ言葉をつらね、在りし日の先生の思い出を新たならしめたが、中にあって、敗戦直後の窓ガラスの破れた、スチームのない、寒中の列車で度々東上された市長時代の先生を語る高山市長の弔詞、老友神戸の枯淡な面影を、生ける人に対するがごとく話しかけられた新村先生の弔詞は、われわれの知る神戸先生をいっそう大きくするものであった。

弔詞についで二百数十通の弔電が披露され、遺族を代表して未亡人の礼拝、主催者を代表して青山学部長の礼拝、遺族代表挨拶、学部長挨拶と式は進み、葬送曲奏楽のうちに、来賓、会葬者一同順次礼拝を行い、午後三時すぎ滞りなく終了した。

この日、朝から小止みなき降雨、天また先生の長逝を惜むがごとき天候であったが、学内外から会葬者およそ三百五十名にのぼり、菅野企画庁長官、浅田大阪スタジアム社長らの顔も見えた。賑やかではなかったけれども、先生のお人柄にまことにふさわしい、清楚にして静寂、しかも荘厳な告別式を執り行うことができたことを、御遺族、京都市その他の関係各位、弔詞をいただいた諸先生・諸先輩、雨天のところを遠近各地から参詣して下さった会葬者御一同、弔電をいただいた方々に対し、深く感謝したい。

左に本学経済学部長・日本学士院長・関西大学学長・京都市長の弔詞を録する。

弔　詞

京都大学名誉教授日本学士院会員法学博士神戸正雄先生は本月十六日午前一時胆石病のため、急逝され、本日京都大学経済学部主催の下にその告別式を行うことに相成りました。実のところ、先生があまり急にお逝くなりになりましたので、学部のものは、一同茫然自失、為すところを知らぬ有様でございます。

先生は明治三十五年七月京都大学に御着任、昭和十二年三月定年制によって御退職になるまで御在職、この間、昭和三年四月租税研究上の業績により、学士院恩賜賞受賞、昭和五年八月学士院会員となられるなど、財政学研究の一路を歩まれつつ学問ならびに教育上に実に立派な業績を残されました。

他面先生はまた円満にして節度ある人柄によってきわめて多くの人々から親愛敬慕されました。先生を尊敬する人々は単に京大で先生の教を受けたもののみでなく日本全体の経済学関係者、自治関係者、あるいは一般京都市民など実に広い範囲にわたっておることを私たちは承知しております。

先生は京都を御愛好になったようであり、京都はついに永住の地かつ御最後の土地となりましたが、わけてもわが経済学部についてはたえず注意ぶかくいろいろと心をお配り下さいました。実は本日学部において告別式を行うのも御遺志に基くものであり、われわれはわが学部に対する先生の御愛情の深さに今さらのように感銘いたしている次第でございます。

神戸先生の春光あうれるごとき温容に接する機会はもはやございません。しかしわれわれ学部関係者一同、この高くかつ深い師の情をかみしめて先生が地下においてにこやかにお欣び下さることをたのしみとして一同努力をつづけたいと存じます。

昭和三十四年十月十八日

京都大学経済学部長　青山秀夫

弔　詞

謹んで日本学士院会員、京都大学名誉教授法学博士神戸正雄君の霊に申し上げます。

君は明治三十三年七月東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し、間もなく京都帝国大学に職を奉じて以来、財政学研究と後進の指導とは専念せられ、退官まで四十有余年、常に孜々として研究に励み幾多の輝かしき業績をなし遂げると共に、多くの優れた学者と有用なる人材を育成せられました。君はまた、他面において財政経済政策および社会事業関係の要職をも歴任し、国家財政、あるいは地方行政に非凡なる手腕を振って来られましたことも既に周知のところであります。君は明治四十一年法学博士の学位を授けられ昭和三年四月多年研鑽を積まれた租税研究の業績により、本院は恩賜賞を授与し、君の卓抜な研究成果を顕彰しました。昭和五年八月本院会員に選定せられ、爾来本院のために尽されました功績は誠に多大でありました。君が昭和二十八年十一月文化功労者に挙げられましたことも真に故ありと申すべきであります。

今や学術振興の要望切なる秋、君の力に俟つべきもの多々ありましたが、このたび不幸にして君の訃報に接し痛惜悲歎の情に堪えません。

ここに本院会員一同を代表して君の学勲を偲び、恭しく弔意を表します。

昭和三十四年十月十八日

日本学士院長　山田三良

弔　詞

謹んで故関西大学顧問神戸正雄先生の御霊前に申し上げます。

わが国学界教養界の巨星として我々の敬慕しやまなかった神戸先生には薬石の効なく遂に逝去せられました。洵に断腸の想いに耐えません。

先生の御業績につきましては今更申すも愚かながら、わが関西大学の歴史に遺されました御足跡もまた偉大でありまして、昭和十一年四月教鞭をとられましてから引続いて昭和十二年四月には学長に御就任、以来更に学長理事の重職に尽瘁せられ戦時多難であった大学の学務行政の両面において不動の基礎を再建せられたのでありまして先生をお慕いする後進数知れず、関西大学の今日あるは偏えに先生の御蔭と申しても過言ではございません。

ついで昭和三十一年顧問となられ、現在に至るまでその長きにわたり先生の御学識と御人格に親しませていただいた我々にとりまして、今日の悲しみはまことに人生無情、御遺族御一同の御心中推察致しましてうたた感慨に堪えません。

ここに先生の霊の安らかに眠りまわんことを祈り、関西大学

関係者一同に代り、衷心より哀悼の意を表する次第であります。

昭和三十四年十月十八日

関西大学学長　矢口孝次郎

弔詞

本日ここに、元京都市長故神戸正雄氏の告別式が行われまするにあたり、謹んでその御霊の前に、哀悼の言葉を申し述べます。

神戸先生。先生がおなくなりになったという知らせを受けましたのは、一昨日の朝でした。予て先生の御健康を祈っていた私にとって、その知らせは、まことに大きな驚きであり、深い悲しみでありました。一昨日も、また昨日も、私は市長室にあって、かつては先生の坐られた椅子により、かつては先生が執務された机を前にして、お元気であった日の先生をあれこれと想い起し、ひとり静かに、尽きぬ悲しみと懐しさとをかみしめたのでした。

神戸先生。先生は学者として偉大な業績を残されました。さらにまた、その晩年には京都市長として大なき功績をあげられました。だが、私はいま、先生が京都市のためにつくされた功績の数々を述べ立てることは、敢えて致しますまい。あの敗戦直後の、市民の生活が最も困難を極めた時期に、先生は文字どうり、誠心誠意、市民のためにすべてをあげておつくしになりました。先生が、そのころ真冬にスティームも通らぬ超満員の汽車にのって、破れた窓から吹込む寒風にさらされながら、しばしば上京され、しかも一度として不平をこぼされたことのなかったのは、いまも先生を慕う市の職員の尊い語り草となっています。私は、先生の後をついで市長に選ばれましたが、市長に就任して、はじめて先生の市長御在職中の、人にはいえぬ御苦労、その御努力のきびしさを知りえたと申してよいのであります。

神戸先生。あれを思い、これを思い、先生を失った悲しみはいよいよ深く、お名残りはいつまでもつきません。しかし、最後のお別れを致さねばなりません。公選初代の京都市長として先生の残された足跡は、京都市のあるかぎり、その歴史に長くとどめられ、また、先生の面影は、市民の心に長く生きつづけるでありましょう。

この悲しみの日、京都市民とともに、心から神戸元京都市長の御霊の御冥福をお祈りし、お別れの言葉と致す次第であります。

昭和三十四年十月十八日

京都市長　高山義三